

所属 高知追手前高等学校吾北分校

氏名 岡 林 美 樹

R G S H 2

1 研究の背景

(1) 今、授業でとてもうまくいっていることや自信をもってやっていること

たいへん素直で真面目な生徒が多いので、授業を妨害されることは全くなく、勉強をやりやすい環境にある。英語の時間に他のことをすることは絶対になく、また授業中に寝る生徒も出していないという自信はある。リラックスして授業が受けられる環境もつくれているように思う。

(2) 今、授業で抱えている問題や悩み

英語の基礎学力が付いておらず、高校入学時においてすでに英語が苦手と嫌いであるという認識を持っている生徒をいかにやる気を持って授業に取り組ませるかが課題である。また、英語が好きで得意としている生徒（英検準2級程度）から、英語が嫌い苦手としている生徒（英検5級程度）が一つのクラスにいるため、授業をどのように展開し、どのくらいの速さで進めていけば良いのかが悩みである。

2 リサーチクエスト

基本的な語順パターンを確実に身につけるにはどのようにすれば良いか。

（日本語と英語は単語の並び方が違うことをしっかりと認識させ、最初は意識をしながら単語を並べ（特に主語S + 動詞V）最終的には自然とできるように定着させる。）

3 予備調査

予備調査1 授業観察の結果

主語Sと動詞V（be動詞 + 過去分詞）をしっかりとつかませるため、日本語・英語ともに主語Sと動詞Vの場所を一文一文確認しながら進めたので進度は非常に遅かったが、ほぼ全員が理解・習得できたように思われる。しかし、日本語の語順を少し変えたりした時、主語Sを取り間違えたり悩んだりした生徒がいたので、英語だけでなく日本語もきちんと押さえるように指導していかなければならないと思った。

予備調査2 英語力を示すデータ

予備調査3 アンケート、授業評価の結果

別添資料『授業評価システムによる授業改善について』参照

予備調査4 生徒の自己評価

予備調査5 文献研究

継続して長い目で行わなければならないということ、到達目標を定めてリサーチすることの大切さ、そしてなによりも生徒との信頼関係が一番重要であることを再確認した。

4 仮説の設定

(1) 仮説

仮説1

日本語と英文を比較し、英文を一語一語訳したものを前からそのまま順番に読んでいくなどの作業を行うことで、日本語と英語は語順が違い、語順を考えずに適当に単語を並べただけでは適切な英文にはならないという事を認識させることができるのではないかと。

仮説2

一度や二度にとどまることなく、繰り返し主語S・述語Vの場所を確認することにより（英語だけではなく日本語も同様である）定着させる。口頭による指導だけではなく、黒板に（色等も違えながら）きっちり記入することにより視覚にも訴えると定着しやすいのではないかと。

仮説3

同じ作業を繰り返すことにより、視覚に訴えていたものを頭の中で考えてできるようになるのではないかと。

仮説4

視覚に訴えるだけではなく、英文を声に出して読むことにより自然と英語が出てくるようになるのではないかと。

仮説5

単語を調べれば語順の知識を持っているので、英語での表現が可能になるのではないかと。

5 計画の実践

日本文と英文を比較し、語順の違いを認識させる。

- ・一語一語訳したものを前からそのまま順番に読む。

日本語及び英語の主語S・動詞Vの場所をしっかりとつかむ。

- ・繰り返し主語S・動詞Vの場所を確認する。
- ・口頭による指導だけではなく、黒板にきっちり記入することにより視覚にも訴える。
- ・日本文では主語を省略しても通じるが英文では省略できない等の違いも勉強する。
- ・平叙文だけではなく、疑問文・否定文・命令文などの語順も確認していく。

上記の作業を継続して行うことにより自然と認識できるようにし、視覚に訴えていたものを頭の中で考えてできるようにする。また、同時に英文を頻繁に声に出して読むことによりしっかりと英文が自然と出てくるようにする。

毎時間、前授業の小テストを行い生徒に復習をきちんとさせると共に生徒の理解度をチェックする。

主語S・動詞Vだけにとどまらず、その他の部分の文の要素も確認し、徐々に文型を増やしていく。

単語を調べれば語順の知識を持って英作ができるようにする。

6 実践の結果

- ・日本語と英語の語順の違いをきちんと把握できている。
- ・『主語は？』『動詞は？』の問いかけに自然と生徒が答えられるようになってきた。(二学期最後の方は問いかける前に生徒の方から主語S・動詞Vを言うようになった。)
- ・英作する際に、自主的にS・Vを記入するようになった。
- ・小テストの結果、少し複雑な文法や新しい文法を学習した後は平均点が下がっている。
- ・主語S・動詞Vが定着した後、目的語O・補語Cの説明をしたら、あまり混乱することなく習得できた。
- ・スピーキングのテストがなかったため、読みに関しては生徒はあまり力を入れてなかったようである。

7 結果の検証

中学校の時に英語が分からなくなり嫌いであった生徒は、初め主語S・動詞Vの定着をはかる活動の必要性・及び理解を全くできていなかったようであるが、回を重ねるごとに(理解ができるようになるにつれて)主語S・動詞Vをさがすことが楽しくなり、そして必要性も感じ始めたようである。そして、自主的に主語S・動詞Vをさがし始めたというのは、明らかに主語S・動詞Vの必要性、日本語と英語の語順の違いを認識したものであるように思われる。

文法的な用語を用いて説明することに関しても、最初は主語Sと書いていたものも途中からSと書くだけで理解できるようになり時間の短縮もはかることができ、生徒も自分で使いこなすことができるようになった。その後での目的語O・補語Cの用語はスムーズに使用することができた。

また、一学期は授業中における机間指導で生徒の理解度をチェックしていただけたが、二学期からは小テストを毎時間行うことにより客観的なデータを得ることができ、一人一人の理解度をチェックすることができフィードバックすることができた。授業者が理解できていると思った事でも平均点が低いという結果がでると、もう一度授業を振り返る良いきっかけとなった。

テストのために生徒が勉強するという状況の中、スピーキングのテストをせずにペーパーテストのみだったの、話すということに関してはあまり力を付けることができなかった。

8 成果と今後の課題

漠然とした到達目標を持ってやってきた授業がこのアクションリサーチで明確なものに変わっていきそうな期待感を抱いて取り組んできた。やはりしっかりと研究テーマ、そしてそれに対する仮説を設定することにより、最低限の目標は確実に達成できたように思う。生徒の理解度の確認をする際、客観的なデータを得ることの大切さも感じた。また、本校のような英語教員が一名の学校ではアクションリサーチは授業改善に欠かせないものであると痛感した。

今後の課題としては、研究テーマを柱として授業改善を行いながら、4つの技能をそれぞれ伸ばしていくような取り組みをしていかなければならない。

このアクションリサーチに取り組んでいくに際し、生徒達に当初から研究テーマを話し協力を得てきた。生徒達と一緒に授業改善できたことを本当に嬉しく思い、生徒達に心から感謝したい。

<参考文献>

佐野正之他「アクションリサーチでの授業改善」 『STEP 英語情報』

2002.5・6月号～2003.3・4月号